

復活節第7主日の直前の木曜はイースターからちょうど40日目、主イエスの昇天を覚える日でした。教会では毎年、昇天日の聖餐式をしてその日を祝っています。復活節第7主日は昇天後主日とも言われます。主イエスの昇天から聖霊降臨日までの10日間、イエスが約束した聖霊を待ち望んで、弟子達が熱心に祈っていたことを覚える大切な日曜です。

復活節第7主日(昇天後主日)に読む使徒書は、使徒言行録からイエスの昇天の様子が書かれたところを朗読します。朗読箇所は昇天日に読むところと重なっています。使徒達は、イエスから聖霊を受ける約束を聞き、イエスの昇天を目撃します。そして、昇天後主日に読まれる箇所で、昇天日には読まない部分(使徒言行録1章12-14)が今週の鍵になるところです。ここには、使徒達がエルサレムで泊まっていた家の上の部屋にあがり、心を合わせて熱心に祈っていたことが書かれています。イエスの昇天を見届けた使徒達は、イエスの約束した聖霊(弁護者、助け主)を待ち望みながら、共に集まり、心を一つにして祈っていたのです。

今日朗読する福音書、ヨハネによる福音書17章は、最後の晚餐の席でイエスがした祈りです。先々週、先週は、主日の福音書で、イエスが最後の晚餐の席で弟子達に伝えたメッセージを読んできましたが、最後の晚餐において、イエスが弟子達にすべてを伝えた最後、まさに受難へと引き渡されるようとする直前に祈った祈りが、この17章に記されています。

受難を前にして、イエスは祈りの中で「時が来ている」と言います。イエスが栄光を受ける時です。栄光とは、十字架の死から復活の命へと引き上げられることです。そして、イエスは弟子達のために執り成しの祈りをします。ヨハネ17章の祈りは、「大祭司の祈り」とも言われています。イエスが、受難を前にして、弟子達のために執り成しの祈りをしているからです。

ユダヤの大祭司は、1年に1度の贖罪の日に、自分自身のため、共に働く祭司達のため、そしてイスラエルの民の共同体全体のために、贖罪の祈りを捧げました。神と民との間に和解をもたらすために祈ったのです。贖罪の祈りと共に、犠牲の献げ物が献げられることも忘れてはいけません。イエスの祈りの中には次のような言葉があります。「彼らのために、わたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってささげられた者となるためです」(ヨハネ17:19)

イエスは、弟子達のために執り成しの祈りを捧げ、犠牲の献げ物としてご自身を献げたのです。イエスの十字架の死には、私たちが神と和解するために、イエスご自身が犠牲の献げ物となった、という意味があることをここから学びたいと思います。

さて、イエスが昇天してから、聖霊降臨までの10日間、弟子達が集まり心を合わせて祈っていたことを思うとき、このヨハネ17章の祈りは、弟子達の祈りに呼応するものだということに気づかされます。イエスは弟子達の祈りに先駆けて、弟子達のために祈り、弟子達を世に遣わすために既に祈っておられたのです。

今を生きる私たちも、弟子達と同じように聖霊を求めて祈りましょう。主イエスは、私たちの祈りに先駆けて、私たちのためにも執り成しの祈りをしてくださったのです。